

エレミヤの哀歌

第一章一ああ哀しいかな古昔は人のみちみちたりし此都邑いまは凄しき様にて坐し寡婦のごとくになれり嗟もろもろの民の中に大いなりし者もろもろの州の中に女王たりし者いまはかへつて貢をいれる者となりぬ二彼よもすがら痛く泣きかなしみて涙面にながるその戀人の中にはこれを慰むる者ひとりだに無くその朋これに背きてその仇となれり三ユダは艱難の故によりまた大いなる苦役のゆゑによりて虜はれゆきもろもろの國に住ひて安息を得ずこれを追ふものみな狹隘にてこれに追しきぬ四シオンの道路は節會の上り來る者なきがために哀しきその門はことごとく荒れその祭司は歎きその處女は憂へシオンもまた自から苦しむ五その仇は首となりその敵は享ゆその愆の多きによりてエホバこれをなやませたまへるなりそのわが子等は虜はれて仇の前にゆけり六シオンの女よりはその榮華ことごとく離れされりまたその牧伯等は草を得ざる鹿のごとくに成りおのれを追ふもの前に力つかれて歩みゆけり七エルサレムはその艱難と窘迫の時むかしの代にありしもろもろの樂しき物を思ひ出づその民仇の手におちいり誰もこれを助くるものなき時仇人これを見てその荒はてたるを笑ふ八エルサレムははなはだしく罪ををかしたれば汚穢たる者のごとくになり前にこれを尊とびたる者もその裸體を見しによりて皆こ

れをいやしむ是もまたみづから嗟き身をそむけて退ぞけり九その汚穢これが裾にあり彼その終局をおもはざりき此故に驚くまでに零落たり一人の慰さむる者だに無しエホバよわが艱難をかへりみたまへ敵は勝ほこれり〇敵すでに手を伸てその財寶をことごとく奪ひたり汝さきに異邦人等はなんぢの公會にいるべからずと命じおきたまひしに彼らが聖所を侵しいるをシオンは見たり二その民はみな哀きて食物をもとめその生命を支へんがために財寶を出して食にかへたりエホバよ見そなはし私のいやしめらるるを顧りみたまへ三すべて行路人よなんぢら何ともおもはざるかエホバその烈しき震怒の日に我をなやましてわれに降したまへるこの憂苦にひとしき憂苦また世にあるべきや考がへ見よ三エホバ上より火をくだしわが骨にいれて之を克服せしめ網を張りわが足をとらへて我を後にむかしめ我をして終日心さびしくかつ疾わづらはしめたまふ四わが愆尤の軛は主の御手にて結はれ諸の愆あひ纏はりてわが項にのれり是はわが力をしておとろへしむ主われを敵たりがたき者の手にわたしたまへり五主われの中なる勇士をことごとく除き節會をもよほして我を攻めわが少き人を打ほろぼしたまへり主酒樽をふむがごとくにユダの處女をふみたまへり六これがために我なげくわが目やわが目には水ながるわがたましひを活すべき慰さむるものわれに遠ければなりわが子等は敵の勝るによりて滅びつせにぎ七シオンは手

をのぶれども誰もこれを慰さむる者なしヤコブにつきてはエ
 ホバ命をくだしてその周圍の民をこれが敵とならしめたまふ
 エルサレムは彼らの中にありて汚れたる者のごとくなりぬハ
 エホバは正し我その命令にそむきたるなり一切の民よわれに
 聽けわが憂苦をかへりみよわが處女もわかき男も俘囚て往り
 九われわが戀人を呼たれども彼らはわれを欺むけりわが祭司お
 よびわが長老は生命を繋がんとて食物を求むる間に都邑の中
 て氣息たえたりニエホバよかへりみたまへ我はなやみてをり
 わが腸わきかへりわが心わが衷に顛倒す我甚しく悖りたれば
 なり外には劍ありてわが子を殺し内には死のごとき者ありニ
 かれらはわが嗟歎をきけり我をなぐさむるもの一人だに無し
 わが敵みなわが艱難をききおよび汝のこれを爲たまひしを喜
 こべり汝はさきに告しらせしその日を來らせたまはん而して
 彼らもつひに我ごとくに成るべし三ねがはくは彼等が與へし
 艱難をことごとくなんぢの御前にあらはし前にわがもるもろ
 の罪愆のために我におこなひし如く彼らにも行ひたまへわが
 嗟歎は多くわが心はつれひかなしむなり

第二章一ああエホバ震怒をおこし黒雲をもてシオンの女を蔽ひ
 たまひイスラエルの榮光を天より地におとしその震怒の日に
 己の足凳を心にとめたまはざりきニ主ヤコブのすべての住居を
 呑つくしてあはれまず震怒によりてユダの女の保若を毀ちこ
 れを地にたふしその國とその牧伯等を辱かしめ三烈しき震怒を

もてイスラエルのすべての角を絶ち敵の前にて己の右の手を
 ひきちぢめ四面を焚きつくす燃る火のごとくヤコブを焚き四敵
 のごとく弓を張り仇のごとく右の手を挺て立ち凡て目に喜こ
 ばしきものを滅しシオンの女の幕屋に火のごとくその怒をそ
 そぎたまへり五主敵のごとくに成たまひてイスラエルを呑ほ
 ぼしその諸の殿を呑ほぼしそのもろもろの保若をこぼちユ
 ダの女の上に憂愁と悲哀を増くはハ六園のごとく己の幕屋を荒
 しその集會の所をほろぼしたまへりエホバ節會と安息日とを
 シオンに忘れしめ烈しき怒によりて王と祭司とをいやしめ棄
 たまへり七主その祭壇を忌棄てその聖所を嫌ひ憎みてその諸
 の殿の石垣を敵の手にわたしたまへり彼らは節會の日のごと
 くエホバの室にて聲をたつハエホバ、シオンの女の石垣を毀た
 んと思ひさだめ繩を張りこぼち進みてその手をひかず壕と
 石垣とをして哀しましめたまふ是らは共に憂ふ九その門は地に
 埋もれエホバその關木をこぼちくだきその王ともるもろの
 牧伯は律法なき國人の中にありその預言者はエホバより異象
 を蒙らず一〇シオンの女の長老等は地に坐りて黙し首に灰をか
 むり身に麻をまとふエルサレムの處女は首を地に低るニわが
 目は涙の爲に潰れんとしわが腸は沸かへりわが肝は地に塗る
 わが民の女ほろぼされ幼少ものや乳哺子は疲ればてて邑の
 街衢に氣息たへなんとすればなりニかれらは疵を負る者の如
 く邑のちまたにて氣息たえなんとし母の懷にその靈魂をそそ

がんとし母にむかひて言ふ穀物と酒とはいづくにあるやと二三
 エルサレムの女よ我なにもて汝にあかしし何をもて汝にな
 らべんやシオンの處女よわれ何をもて汝になぞらへて汝をな
 ぐさめんや汝のやぶれば海のごとく大なり嗟たれか能く汝を
 醫さんや四なんぢの預言者は虚しき事と愚なることとなんぢ
 に預言しかつて汝の不義をあらはしてその俘囚をまぬかれし
 めんとはせざりきその預言するところは唯むなしき重荷およ
 び追放たるる根本となるべき事のみ一五すべて往來の人なんぢ
 にむかひて手を拍ちエルサレムの女にむかひて嘲りわらひか
 つ頭をふりて言ふ美麗の極全地の欣喜となへたりし邑は是
 なるかと一六なんぢのもるもろの敵はなんぢに對ひて口を開け
 あざけり笑ひて切齒をなす斯て言ふわれら之を吞つくしたり
 是われらが望みたりし日なり我ら已に之にあへり我らずでに
 之を見たりと一七エホバはその定めたまへることを成しいにし
 へより其命じたまひし言を果したまへりエホバはほろぼして
 憐れまず敵をして汝にかちほこらしめ汝の仇の角をたかくし
 たまへり一八かれらの心は主にむかひて呼はれりシオンの女の
 墻垣よなんぢ夜も晝も河の如く涙をながせみづから安んずる
 ことをせず汝の瞳子を休むることなかれ一九なんぢ夜の初更に
 起いでて呼さけべ主の御前に汝の心を水のごとく灌げ街衢の
 ほとりに饑たふるるなんぢの幼兒の生命のために主にむかひて
 兩手をあげよ二〇エホバよ視たまへ汝これを誰におこなひしか

願はくは顧みたまへ婦人おのが實なるその懐き育てし孩兒を
 食ふべけんや祭司預言者等主の聖所において殺さるべけんや二
 一をさなきも老たるも街衢にて地に臥しわが處女も若き男も刃
 にかかりて斃れたりなんぢはその震怒の日にこれを殺しこれ
 を屠りて恤れみたまはざりき三なんぢ節會の日のごとくわが
 懼るるところの者を四方より呼あつめたまへりエホバの震怒
 の日には遁れたる者なく又のこりたる者なかりきわが懐き育
 てし者はみなわが敵のためにほろぼされたり
 第三章一我はかれの震怒の咎によりて艱難に遭たる人なり二か
 れは我をひきて黑暗をあゆませ光明にゆかしめたまはず三まこ
 とに屢々その手をむけて終日われを攻なやまし四わが肉と肌膚
 をおとるへしめわが骨を推き五われにむかひて患苦と艱難を築
 きこれをもて我を圍み六われをして長久に死し者のごとく暗き
 處に住しめ七我をかこみて出ること能はざらしめわが鎖索を重
 くしたまへり八我さけびて助をもとめしとき彼わが祈禱をふせ
 ぎ九研たる石をもてわが道を塞ぎわが途をまげたまへり一〇そ
 の我に對することは伏て何がふ熊のごとく潜みかくるる獅子の
 ごとし二われに路を離れしめ我をひきさきて獨くるしましめ
 三弓を張りてわれを矢先の的となし三矢筒の矢をもてわが腰
 を射ぬきたまへり四われはわがすべての民のあざけりとなり
 終日うつたひそしらる五かれ我をして苦き物に飽しめ茵蔯を飲
 しめ一六小石をもてわが齒を推き灰をもて我を蒙ひたまへり一七

なんぢわが靈魂をして平和を遠くはなれしめたまへば我は福祉をわすれたり一八是において我みづから言りわが氣力つせゆきぬエホバより何を望むべきところ無しと一九ねがはくは我が艱難と苦楚茵陳と膽汁とを心に記たまへ二〇わがたましひは今なほ是らの事を想ひてわが衷に鬱ぐ二われこの事を心におもひ起せりこの故に望をいだくなり三われらの尚ほろびざるはエホバの仁愛によりその憐憫の盡ざるに因る三これは朝ごとに新なりなんぢの誠實はおほいなるかな四わが靈魂は言ふエホバはわが分なりこのゆゑに我彼を待ち望まん五エホバはこれを待ち望む者とおのれを尋ねもとむる人に恩恵をほどこしたまふ二六エホバの救拯をのぞみて靜にこれを待は善し七人わかし時に軛を負は善し二八エホバこれを負せたまふなれば獨坐して黙すべし二九口を塵につけよあるひは望あらん三〇おのれを撃つ者に頬をむけ充足れるまでに恥辱をつけよ三一そは主は永久に棄ることを爲たまはざるべければなり三二かれは患難を與へ給ふといへどもその慈悲おほいなればまた憐憫を加へたまふなり三三心より世の人をなやましかつ苦しめ給ふにはあらざるなり三四世のもろもろの俘囚人を脚の下にふみにじり三五至高者の面の前にて人の理を枉げ三六人の詞訟を屈むることは主のよごび給はざるところなり三七主の命じたまふにあらすば誰か事を述んにその事即ち成んや三八禍も福もともに至高者の口より出るにあらすや三九活る人なんぞ怨言べけんや

人おのれの罪の罰せらるるをつぶやくべけんや四〇我等みづからの行をしらべかつ省みてエホバに歸るべし四一我ら天にいます神にむかひて手とともに心をも擧べし四二われらは罪をかし我らは叛きたりなんぢこれを赦したまはざりき四三なんぢ震怒をもてみづから蔽ひ我らを追攻め殺してあはれまず四四雲をもてみづから蔽ひ祈禱をして通せざらしめ四五もろもろの民の中にわれらを塵埃となしたまへり四六敵は皆われらにむかひて口を張れり四七恐懼と陥阱また暴行と滅亡我らに來れり四八わが民の女の滅亡によりてわが眼には涙の河ながる四九わが目は斷ず涙をそそぎて止す五〇天よりエホバの臨み見て顧みたまふ時にまで至らん五一わが邑の一切の女等の故によりてわが眼はわが心をいたましむ五二故なくして我に敵する者ども鳥を追ごとくにいたく我をおひ五三わが生命を坑の中にほろぼしわが上に石を投げかけ五四また水わが頭の上に溢る我みづから言り滅びうせぬと五五エホバよわれ深き坑の底より汝の名を呼び五六なんぢ我が聲を聴たまへりわが哀歎と祈求に耳をおほひたまふなかれ五七わが汝を籲たりし時なんぢは近よりたまひて恐るるなかれと宣へり五八主よなんぢはわが靈魂の訴を助け伸べわが生命を贖ひ給へり五九エホバよなんぢは我がかうむりたる不義を見たまへり願はくは我に正しき審判を與へたまへ六〇なんぢは彼らが我を怨みわれを害せんとはかるを凡て見たまへり六一エホバよなんぢは彼らが我を詈り我を害せんとはかるを凡て

聞たまへり六二かの立て我に逆らふ者等の言語およびその終日
 われを攻んとて運らす謀計もまた汝これを聞たまへり六三ねが
 はくは彼らの起屠をかながみたまへ我はかれらに歌ひそしら
 る六四エホバよなんぢは彼らが手に爲すところに循がひて報を
 なし六五かれらをして心くらからしめたまはんなんぢの呪詛か
 れらに歸せよ六六なんぢは震怒をもてかれらを追ひエホバの天
 の下よりかれらをほろぼし絶たまはん

第四章一ああ黄金は光をうしなひ純金は色を變じ聖所の石は
 もろもろの街衢の口に投すてられたり二ああ精金にも比ぶべき
 シオンの愛子等は陶器師の手の作なる土の器のごとくに見做る
 三山犬さへも乳房をたれてその子に乳を哺す然るにわが民の女
 は殘忍荒野の鴛鳥のごとくなれり四乳哺兒の舌は渴きて上顎に
 ひとと貼き幼兒はパンをもとむるも擘てあたふる者なし五
 肥甘物をくらひ居りし者はおちぶれて街衢にあり紅の衣服に
 て育てられし者も今は塵堆を抱く六今我民の女のうくる愆の罰
 はソドムの罪の罰よりもおほいなりソドムは古昔人に手を加
 へらるることなくして瞬く間にほろぼされしなり七わが民の中
 なる貴き人は従前には雪よりも皎潔に乳よりも白く珊瑚より
 も躰紅色にしてその形貌のうるはしきこと藍玉のごとくなり
 しがハイいまはその面くるぎが上に黒く街衢にあるとも人にしら
 れずその皮は骨にひとと貼き乾きて枯木のごとくなれり九劍
 にて死者は饑て死者よりもさいはひなりそは斯る者は

田圃の産物の整るによりて漸々におとろへゆき刺れし者のこ
 とくに成ばなり一〇わが民の女のほろぶる時には情愛ふかき
 婦人等さへも手づから己の子等を煮て食となせり一エホバそ
 の憤恨をことごとく洩し烈しき怒をそそぎ給ひシオンに火を
 もやしその基礎までも焼しめ給へり二地の諸王も世のもろ
 もろの民もすべてエルサレムの門に仇や敵の打いらんとは信ぜ
 ざりき三斯なりしはその預言者の罪によりその祭司の愆によ
 れりかれらは即ち正しき者の血をその邑の中にながしたりき二
 四今かれらは盲人のごとく街衢にさまよひ身は血にて汚れをれ
 ば人その衣服にふるるあたはず五人かれらに向ひて呼はり言
 ふ去れよ穢らはし去れ去れ觸るなかれと彼らはしり去りて
 流離ば異邦人の中間にても人々また言ふ彼らは此に寓るべか
 らずと六エホバ怒れる面をもてこれを散し給へり再びこれを
 顧みたまはじ人々祭司の面をも尊ばず長老をもあはれまざり
 き七われらは頼まれぬ救援を望みて目つかれおとろふ我らは
 俟みたりしが救拯をなすこと能はざる國人を待をりぬ八敵わ
 れらの脚をつかがへば我らはおのれの街衢をも歩くことあたは
 ず我らの終ちかつけり我らの日つきたり即ち我らの終きたり
 ぬ九我らを追ふものは天空ゆく鷲よりも迅し山にて我らを追
 ひ野に伏てわれらを伺ふ二〇かの我らが鼻の氣息たる者エホバ
 に膏そそがれたるものは陷阱にて執へられにき是はわれらが
 異邦にありてもこの蔭に住んともおもひたりし者なり二ウズの

地に住むエドムの女よ悦び樂しめ 汝にもまたつひに杯めぐり
 ゆかんなんぢも酔て裸になるべし三シオンの女よなんぢが愆
 の罰をはれり重ねてなんぢを虜へゆきたまはじエドムの女
 よなんぢの愆を罰したまはん 汝の罪を露はしたまはん
 第五章一エホバよ我らにありし所の事をおもひたまへ 我らの
 恥辱をかへりみ觀たまへニわれらの産業は外國人に歸しわれ
 らの家屋は他國人の有となれりニわれらは孤子となりて父あら
 ずわれらの母は寡婦にひとし四われらは金を出して自己の水を
 飲みおのれの薪を得るにも價をはらふ五われらを追ふ者われら
 の頸に迫る我らは疲れて休むことを得ず六食物を得て饑を凌が
 んとてエジプト人およびアツスリヤ人に手を與へたり七われら
 の父は罪をわがして已に世にあらず 我らその罪を負ふなりハ
 奴僕等われらを制するに誰ありて我らを之が手よりすくひ出す
 ものなし九 荒野の刀兵の故によりて我ら死を冒して食物を得
 饑饉の烈しき熱氣によりてわれらの皮膚は爐のごとく熱しニ
 シオンにて婦人等をかされユダの邑々にて處女等けがさるニ
 侯伯たる者も敵の手にて吊され老たる者の面も尊とばれずニ
 少き者は石磨を擔はせられ童子は薪を負ふてよるめきニ四 長老
 は門にあつまることを止め少き者はその音樂を廢せりニ五 我ら
 が心の快樂はすでに罷みわれらの跳舞はかはりて悲哀となり
 六 われらの冠冕は首より落たりわれら罪をわがしたれば禍なる
 かなニ七これが爲に我らの心づねへこれらのために我らが目く

らくなれりニハシオンの山は荒はて 山犬はその上を歩くなりニ九
 エホバよなんぢは永遠に在す なんぢの御位は世々かぎりなしニ
 ○ 何とて我らを永く忘れわれらを斯ひさしく棄おきたまふやニ
 一 エホバよねがはくは我らをして汝に歸らしめたまへわれら歸
 るべし 我らの日を新にして昔日の日のごとくならしめたまへニ
 二 さりとも汝まつたく我らを棄てたまひしや 痛くわれらを怒り
 めたまふや